gendai.ismedia.jp

4月から18歳が成人に…多くの人が知らない「18歳成年制度」の本当の意味（広井 多鶴子）@gendai_biz

広井 多鶴子 プロフィール

変わるべきは若者ではなく大人と社会

ところで、民俗学者の田嶋一（2016）は、かつての「共同体の人間形成の目的は、何よりも村の新しい構成員を『一人前』の村人にまで育てあげるというところにおかれていた」と指摘しています。こうした民俗学の指摘からすると、今日の日本社会は、むしろ歴史的に特異なものに思えます。年齢によって誰でも自動的に成年に達する20歳成年制度によって、社会は新しい構成員を一人前に育てあげようとする意欲も責任もその仕組みも喪失してしまったかのようです。

民俗学によれば、かつての農耕社会の子どもは、7歳になると家の農作業を始め、一定の労働能力を身につけることによって、はじめて村の正式な構成員として認めらたといいます。村の一員となった若者は、村の寄合いや行事、共同作業や神事に参加し、服装や髪形などを大人にものに変えます。また、およそ15歳で成人式を迎えると、親による保護やしつけは終了し、「若者組」や「娘組」という組織に加わり、結婚するまで集団生活を営みます。そうした村での活動や若者組での生活を通して、村の一員としての規範や労働能力や技術を身につけたといいます。

ここで注意しておきたいのは、民俗学のいう年齢は数え年だということです。15歳は満年齢では13歳か14歳です。今でいえば思春期に当たるこの年齢が成年年齢と見なされていたのは、労働や生殖が可能になるだけの身体的成熟が大人として認められる主な基準となっていたからです。そのため柳田國男は、戦後、中央青少年問題協議会で「成人の日」のあり方を協議する際、20歳では遅すぎると主張しました。15歳が「童」（子ども）でなくなる時期であり、「子供の機会」はもっと早く終わっているというのです。柳田にとって20歳成年制度は、歴史が培ってきた「伝統」に反し、「人類の進化」を損なうものでした。

しかし、当然のことながら、数え年15歳はまだ未熟です。柳田は、「自分だけでなくて、ほかの者も食わせる力がある」と認められてはじめて、一人前の「背（せ）」（男）となり「妹（いも）」（女）となると

指摘しています。それゆえ柳田は、20歳になるまで子どもと見なし、20歳になったら「たちまち大人になってしまう」よりは、大人になる時期を20歳より引き下げて二段階に分け、「人間としての準備期間」を設けるべきだと主張します。15歳は「大人の人間としての完成時代」ではなく、「子供でなくなったとき」であり、「人間の準備期間」のはじまりだというのです。

こうした柳田の指摘から分かるのは、20歳成年制度は成年の基準を身体的成熟から精神的な成熟へと変えるとともに、成年年齢を「大人のはじまり」の時期から「大人の完成」の時期へと転換したということです。その結果、今日の社会は、若者に大人としての経験を積む大人の準備期間を保障せず、若者を一人前に育てる責任も負わないまま、若者に対して20歳になったとたんに精神的に成熟した大人になることを求めるようになりました。